



今年は満 75 歳を迎え、何とはなしに人生の節目を感じています。そんな折、御文の一文にどつきりとさせられました。「そもそも当年の夏このごろは、なにとやらん、ことのほか睡眠におかされてねぶたく候は、いかんと、案じ候えば不審もなく往生の死期もちかづくかとおぼえ候う。まことにもってあじきなく、名残おしくこそ候え」(御文第一帖の6通)と。

この御文は文明 5 年 4 月 25 日(旧暦では夏)、蓮如上人 58~9 歳頃に書かれたものです。現在でいえば、まだ還暦を間近に控えたころだと言えますが、すでに死期を実感されていたということになります。この当時の平均年齢はお文(第 4 帖の 2 通)に依れば、56 歳とありますから、そんな思いになられたのも当然のことかもしれません。現在では人生百年時代と言われ、まだまだと、生きられると錯覚に陥る言葉ではありますが、蓮如上人の御文は続くのです。

「明日もしらぬいのちてこそ候に、なにごとをもうすもいのちおわりそうらわば、いたずらごとにてあるべく候。いのちのうちに、不審もとくとくはれられそうらわで、さだめて後悔のみにてそうらわんずるぞ御こころえあるべく候う」と。要約すれば、明日が分からない人生を生きている身であるのだから、生きていうちに阿弥陀如来の明るい目に一刻も早くめぐりあい、自分が生きた確かな意味を明らかにしてほしいのです、と。

この御文は見玉尼(蓮如次女)が思い病にかかり、その世話をしながら世間話に明け暮れている人たちに宛てられたものでした。500 年以上たった今、私にまで届けられた言葉でもありました。

R4 秋 秋季永代経

読 開始時間 午前十時より十一時二十分まで
経 午前十時~十時四十分 休憩 法話 M・S

「コロナ感染拡大中により、春に引き続き午前のお勤めとさせていただきます。またお齋につきましてもなしとさせていただきますので、ご理解のほどよろしくお願い申し上げます。 9月26日(金) 秋分の日

いずれも、だれもが口ずさんだなつかしさあふれる歌です。「この童謡の中に仏教信仰のエッセンス(本質)が全部含まれている」と指摘したのが、日本人ならぬ韓国の李教授でした。韓国ではキリスト教信者が30パーセント、最近では35パーセントに達しているのに、日本ではわずかに1パーセントにとどまっている。その理由については、日本の学者は神道による自然観、仏教的浄土観、先祖崇拜などを挙げたが、そのあとの懇談で、李先生は「私は、日本人がとてもしらやましい。なぜかというところ、仏教が多くの日本人の心すみずみにまでしみ通っているではありませんか」と言われました。

歌い慣れた童謡のなかに仏教のエッセンスが歌いこまれている。そういえば日本人はかつて夕焼けの空の彼方に浄土をイメージしていたのだと納得した次第です。

「夕焼け論」

M・M

先日、墨俣図書館から借りた山折哲雄著の「暮らしの中の祈り」を読んでいて、興味深い記事に出会ったので、感じたままを記述させていただきます。
章題は「夕焼け論」です。中村雨紅が作詞した「夕焼け小焼け」が示され、続いて三木露風の「赤蜻蛉」が掲載されていました。まずその歌詞を見てみましょう。

夕焼け小焼け 作詞 中村雨紅

夕焼け小焼けで日が暮れて

山のお寺の鐘が鳴る

お手々つないでみな帰る

からすといつしよ帰るまじよ

赤蜻蛉 作詞 三木露風

夕焼け小焼けの赤とんぼ

追われてみたのは

いつの日か



墨俣河川敷

今月の掲示板

お寺のこれから、お手本に。



ご門徒や、ご縁のある近隣の団体、個人の方からの協力を得て開催された市。新鮮な野菜も並んでいました。

寺の形骸化が危ぶまれて久しくなるが、その傾向は一向に変わってはいない。ご願長寺さんの取り組みのありようから、ただ手をこまねいているだけでなく、できることから地道に活動を始めることの大切さを学ぶことができました。



光受寺掲示板にも掲示しておきました。

8月19日(金)岐阜市日置江の願長寺さんで「いら市」が開かれ、ご縁のある多くの人たちが訪れていた。特に子供たちの多さには驚かされたが、日頃からのご住職をはじめ坊守さんやご老僧の「出会いの場としての寺」の復活への篤い願いが形に表れた催しのように感じられた。また「がんちようじ子ども会夏おたのしみ会」が同時開催されており、市のほかにゲームなどを楽しむ場も設けられており、まさに大人も子供も大いに楽しみ交流を深める場となっているように感じた。境内、本堂、庫裏にいたるまですべてが解放され、かなり大がかりな市の催しとなりました。

仏教は
都合よく生きられたら
都合よく生きられたら

「幸せ」だ、
という夢から

覚める教えです。

東京 台東区

忠綱寺 掲示板

私たちは自分の都合によって、良い、悪い、幸、不幸をはかっています。もちろん自分に都合のよいことは良いとし、幸とします。反対に都合の悪いことが起きれば悪いとし、不幸とします。しかしそれぞれの良い悪いはその時によって、またその人によって全く反対の受け止めになってしまうことはよくあることです。都合よく生きることと心を砕き、都合よく生きられることが「順風満帆」の人生だと、思い込みがちですが、現実には避けられない苦難が必ず待ち構えているものです。その苦難が縁となり仏法によって、目覚めさせられるのでしょ。

新「下」

十二回連載

樹 林(ご門徒、ペンネーム)

宗祖親鸞聖人御誕生八百五十年立教開宗協賛テーマ

南無阿弥陀仏 人と生まれたことの意味をたずねていこう

— 問い続ける歩みをともし —

6 回目



こころの散歩

怨霊と宗教

樹 林

紫式部の源氏物語については、断片的に聞き及ぶのみですが、怨霊がしばしば登場し、煩惱が交錯する平安時代の人間像が描かれています。主役を演じる光源氏は、女性をめぐる複雑な関係の中で、六条御息所が怨霊となり、正妻の葵の上に憑いて死に至らしめる場面があります。

光源氏は、現在でいえば典型的なプレーボーイで、次々に女性と関係を結び、裏切られた女性が怨霊となっています。優雅な貴族生活の中で男女とも奔放な生活に明け暮れるのですが、その裏では、ねたみ、恨みの感情がうずまき、その結果、数々の悲劇が生まれていきます。まさに煩惱渦巻く修羅の世界が展開されたものと想像できます。

平安時代は、まだ浄土思想も未熟で、自力に頼る生活が主流だったと思われ、その分、人々の精神的な苦悩もさらに深いものがあったと想像されます。栄華の裏に潜む苦悩、鎌倉仏教が待たれます。

光受寺御遠念法要



【連絡】

光受寺同朋会 9月10日(土) 午後6時半～

金曜茶話会 毎週金曜 午後1時半～3時半